

●大事な体のコトを考える●

日々の健康医学講座



今号担当
今井内科胃腸科クリニック院長
今井 英人

第633回

患者数の多い難病

潰瘍性大腸炎について

症状としては、下痢や粘血便などの便の異常や、発熱や体重減少などが見られます。

みなさんは、潰瘍性大腸炎という病気をご存知でしょうか？この病気は、何らかの原因により大腸の粘膜に炎症が起こり、びらんや潰瘍ができる病気で、原因や治療法が確立していない病気を対象に国が定めた、特定疾患という難病に指定されています。難病といっても特別珍しい病気ではなく、潰瘍性大腸炎の患者数は現在8万人を超え、特定疾患のなかでも最も患者数が多い病気となっています。男女で発症頻度に差はなく、発症年齢が10〜30代を中心に幅広い年齢層に分布していることから、身近に接することがあるかもしれない病気と言えます。

●潰瘍性大腸炎の症状と原因

潰瘍性大腸炎の炎症は、通常、大腸のなかでも肛門に近い直腸から始まり、大腸の奥の方へ広がっていきと考えられています。症状としては、下痢や粘血便などの便の異常と発熱や体重減少など全身から症状が見られます。これらの症状は、おさまったり（緩解期）、悪化したり（活動期）を繰り返すことが多く、長期に

わたって病状が変化していくと考えられています。

原因については現在、自己免疫機序などの免疫機能の異常が関与しているという説が有力です。この説は、人間の体には外部から異物が侵入したときにそれを排除する仕組み（免疫機能）が備わっており、大腸にもこの免疫機能が働いています。この免疫機能に異常が生じると、自身の大腸粘膜を異物と見なしてしまい、これを攻撃して傷つけるようになり、その結果、潰瘍性大腸炎が起こってしまうというものです。ただ、この説も決定的ではなく、免疫異常がどうして起こってしまうのかなど、わかっていないことは数多く残っています。

●治療法について

潰瘍性大腸炎の治療は、病気の重症度に合わせて細かく決められています。内科的治療では5-アミノサリチル酸製剤、ステロイド薬、免疫抑制剤などの薬剤が使われ、一定の成果が得られていますが、病状によって15〜30%位の頻度で外科的治療も行われることがあります。また、新しい治療法として白血球除去療法という治療も行われるようになり、治療の成績は良くなっています。難病

とは言うものの、健康な人と変わらない社会生活を送ることが可能になっています。今後、より詳細に解明されると、この病気の根本的な治療法が開発されることも期待できます。

※

潰瘍性大腸炎につき簡単に説明しましたが、下痢や血液混じりの便が続いているような方は、この病気の他にも大腸がんや慢性の炎症を起こす別の腸疾患も疑われます。大腸内視鏡検査などで、正確に診断する必要がありますので、早めに専門医にご相談ください。



●内科●胃腸科●小児科●老人科●人間ドック併設

医療法人

今井内科胃腸科クリニック

院長 今井 英人

〒465-0097 名古屋市名東区平和が丘5丁目27番地
TEL&FAX 052-771-3322(代)

